

甘雨公に陪遊せし瑤池公の漢詩

淡路博和

はじめに

先ず、甘雨公^{かんうこう}とは、安中藩第十五代藩主板倉勝明^{かづあきら}のことです。彼は学者大名として全国的に有名でしたが、安中では「安政遠足」を実施した殿様として知られています。

瑤池公^{ようちこう}とは甘雨公の弟で、第十六代安中藩主板倉勝殷^{かつまさ}のことです。彼が藩主を継承したのは、甘雨公が病死した安政四年^{てんしやう}のことで、「安政遠足」の二年後のことでした。

冊簡百三十五号に拙稿「意識・板倉勝明^{かづあきら}著『同宗松山侯に贈る書』」を載せていただきました。その文中で、甘雨公は安政二年春に、江戸近郊の名所巡りを行ったと記しています。弟の瑤池公と九人の家臣を従え、騎馬で巡覧した様子が記されています。

当時、外国船の近海出沒から、国防意識が高揚し、武士たちの体力気力の向上をはかるため、幕府でも幕臣たちに騎馬での遠出^{とんとし}を奨励したようです。

甘雨公は文中で、当時の世間の武事優先に対して、文事の大切さに触れ、武事は文事の「羽翼^{うよく}」（補佐）であると説いております。しかしながら、かく言う彼自身も、このような騎馬での遠出を行ったのであります。家臣も退屈な藩邸勤めから公然と抜け出せるのですから、おそらく喜んで従ったことでしょう。時がちょうど安政二年^{てんしやう}二月末から三月初めですから、安中で「遠足^{とんとし}」を行う三ヶ月前のことになります。ひょっとすると、この時に甘雨公の頭の中に「遠足」実施の案が浮かんだのかもしれませんが。

さて、その時の甘雨公一行の日程と行き先を挙げてみますと左記のようです。陽暦になおしてみますと、四月ですから、大分暖かくなっていたと思われます。

○安政二年^{てんしやう}

陰暦 陽暦

二月廿三日 4/9 紅葉の名所で名高い王子の瀧野川

廿七日 4/13 潮干狩りで名高い深川^{ふかがわ}の洲崎

品川沿岸の砲台

三月朔日 4/17 武州の玉川、香魚を食す

九日 4/25 駒場の薬園、北澤村の藤

高井戸村で雷雨、沾湿して帰邸

甘雨公に従った瑤池公や九人の家臣たちは、遊覧先ではそれぞれに漢詩文を作り、『同宗松山侯に贈る書』の中に載せております。順番に名前と題材をあげてみますと、

弟瑤池公（板倉勝殷） 玉川 舟遊び

添川廉斎（安中藩儒者） 玉川 香魚

竹内 韶（家臣） 玉川 香魚

飯田 保（家臣） 玉川 香魚

芳賀春房（家臣） 玉川 香魚

深川久和（家臣） 玉川 香魚

河合 常（家臣） 玉川 香魚

小林 愨（家臣） 玉川とその往復の風景

江場 璋（家臣） 駒場薬園と北沢村牡丹

竹内 魯（家臣） 駒場薬園と北沢村藤花

香魚とは鮎のことで、漁師が投じた網に捕獲された新鮮な鮎を焼いて、お酒を飲みながら食べたことが、彼らには強く印象づけられたものと思われ、詩の数も多い。

これらの漢詩文みても、甘雨公の文教重視・学文奨励の姿勢が見られるように思うのです。ここではその中から、最初に載っている瑤池公の漢詩を紹介してみます。

（原文）

三月朔 奉陪 家兄甘雨公遊玉川七律一章

玉川如帶繞汀洲

滿目風光事々幽

漁老短簑閑撒網

釣童小笠靜投鈎

一瓢濁酒慰勞倦

數首新詩記勝遊

戲代?師欲移棹

苦辛更向急湍流

劣弟殷 再拜敬具

（書き下し文）

三月朔^{つたち} 蒙^{まへいかんこう} 兄甘雨公に陪し奉^り、
玉川^{たまがわ}に遊ぶ七律一章

玉川は帯の如く汀^{てい}洲^{しゅう}を繞^{めぐ}りし
満^{まん}目の風光^{ふうこう}は事々^{じじ}幽^{ゆう}なり
漁^{ぎょ}老^{ろう}短^{たん}簍^{さう} 閑^{のど}かに網^{あみ}を撒^まじ
鈎^{こう}童^{どう}小^{しょう} 笠^{りゅう} 静^{はり}かに鈎^{こう}を投^なず
一^{いつ}瓢^{びょう}の濁^{だく}酒^{しゅ} 勞^{ろう}倦^{けん}を慰^{なぐさ}め
數^{すう}首^{しゅ}の新^{しん}詩^し 勝^{しょう}遊^{ゆう}を記^きす
戯^{たわむれ}に師^しに代^{かわ}り棹^{さお}を移^{うつ}さんと欲^{ほつ}せば
苦^く辛^{しん} 更^{さら}に惹^き湍^{たん}に向^むひて流^{なが}る
劣^{れつ}弟^{てい}殷^{いん} 再^{また}拜^{はい}敬^{けい}具^ぐ

(語注)

七律一章というのは、七言律詩のことで、一句が七
字で、八句で一章となります。そして、第三句と第
四句、それと第五句と第六句が、それぞれ対句にな
っています。なお、劣^{れつ}弟^{てい}とは自らを謙遜した表現。

(右漢詩の意識)

兄甘雨公に陪^{ばい}し奉^{たてま}りて、玉川に遊んだ時に詠んだ
七言律詩の一章です。

玉川は帯のようで砂地を繞^{めぐ}らし、見渡す限りの景色
は幽玄な感じですよ。短い簍^{さう}を身につけた老いた漁師
が長閑^{のどか}に網を投^なげており、小さな笠^{かき}をかぶった子
供が、静かに釣^つり糸^{いと}を垂^たれています。瓢^{びょう}簍^{さう}に入
れた濁^{じく}り酒^{しゅ}は、疲^へれた気^けだるさを慰^{なぐさ}めてくれ、
幾つかの新しい詩が風流な遊びを記しています。
たわむれに船頭に代^{かわ}わって棹^{さお}を動かしますと、ど
う苦^く辛^{しん}しても、舟はさらに急流に向^むかって流^{なが}れて
いってしまうのです。

劣^{れつ}弟^{てい} 殷^{いん} (板倉勝殷^{いたぐら かついん}) 再^{また}拜^{はい}敬^{けい}具^ぐ